

# 大学生の知識・技能の習得における学習経験の影響

藤 本 佳 奈 (教育・学生支援機構特命助教)

## 1. はじめに

近年、大学進学ユニバーサル化、それに伴う大学、大学生の多様化という現状を受け、学士レベルの資質能力の育成など大学教育の成果を求める声が大きいの。平成20年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、各専攻分野を通じて培う能力として「学士力」を提唱し、学生が身につけるべき能力を提示している。また、産業界からも職業人として身につけておくべき能力の育成が求められ、経済産業省では「社会人基礎力」を、厚生労働省では「若年者就業基礎能力」とそれぞれ、職業人として社会に出るまでに身につけておくべき能力を提唱している。

このように政策的レベルで教育成果が求められる状況と相まって、大学教育の成果とは何か、大学教育の成果はどのような構造に規定されているのかという点が、研究レベルでも重要な関心事項となっており、そのための調査・研究が徐々に蓄積され始めている。

まず、我が国においてこの分野に先鞭をつけたのは、教育関連産業であるという(小方 2008)。ベネッセによる「学生満足度と大学教育の問題点」(ベネッセ 1998、2002、2004)、リクルートの「大学教育改革の学生認知度調査」(リクルート 1998、2000)などがそうであり、在学学生を対象とした質問紙調査に基づき、学生の能力形成に影響を及ぼす諸要因を示している。

教育成果に関わる研究については、2000年代中頃から散見されるようになった。村澤(2003)は、学生の能力・力量の向上に対して、大学入学以前の経験や、在学中の学習の取り組みの規定力が大きいこと、葛城(2006)は、教育成果はどのような教育をするか(「教育の質」)よりも、実際に学生がどういった学習を行ったか(「学習経験の質」)によって規定されることを指摘している。小方(2008)は能動的学習や、授業外の学習時間が、教育成果に対する評価を高めていることを指摘している。

以上のような教育成果に関する先行研究からは、概して学生の在学中の学習への取り組みが、知識・技能の習得といった教育成果にプラスの影響力を持っていることが指摘されている。このような知見は大学教育の改善において有効なエビデンスとしての役割を果たしている。

しかし、それらは複数の大学を対象に行われた大規模調査に基づいており、近年の大学進学率の上昇に伴う大学・大学生の多様性はさほど考慮されていない。入学難易度や、大学の設置者、単科大学、総合大学、所在地など、機関の特性によって学生の意識や行動は大きく異なっており(山田 2009)、教育成果やそれらを規定する要因も機関特性により異なっていると考えられる。それゆえ、「大学」を一括りに扱うのではなく、難易度や設置者といった機関の特性を考慮する必要がある。

そこで本研究では機関特性に考慮すべく、ある地方都市に所在する中堅国立大学を分析対象に設定した。中堅国立大学の学生を対象に行った学生調査に基づき、本研究では、教育成果がいかなる構造において規定されているのか明らかにしたい。

## 2. 分析の枠組み

### 2-1. 調査の概要と調査対象者の特徴

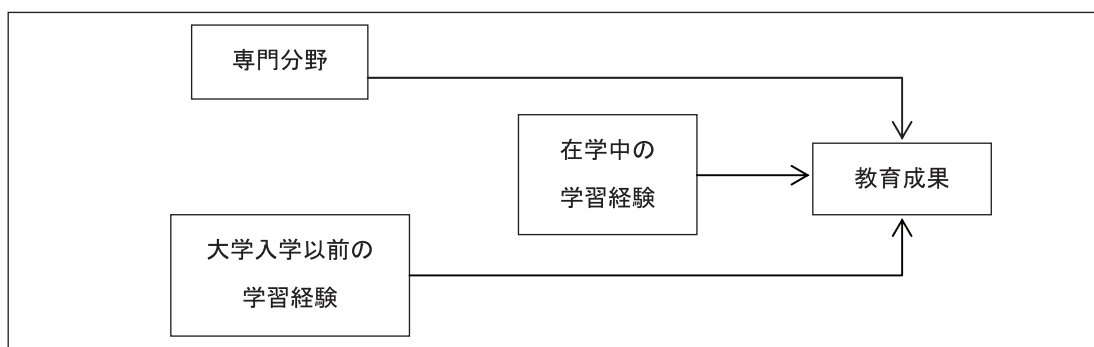
本研究の分析対象はある地方都市に所在する中堅国立 A 大学の 1 年生である。国立 A 大学は、教育系 1 学部、社会科学系 2 学部、自然科学系 2 学部、医療系 1 学部からなる総合大学である。調査は、2010 年 1 月に行われ、1,181 名の回答を得た。なお、A 大学の入学定員数を母集団とした場合、回収率は 97.8% である（夜間部は除く）。対象者の性別は男子学生が 58.6%、女子学生が 41.4%。専門分野別では、教育系 15.4%、社会科学系 37.4%、自然科学系 35.5%、医療系 11.7% である。

### 2-2. 分析の枠組み

本研究では、教育成果の指標として、調査時点における学生の知識・技能の習得状況を用いる。また、教育成果を規定する要因として、大学生の学習経験に着目する。学習経験には、大学入学以前と在学中の学習経験を変数として用いる。先行研究において、教育成果には学生の在学中の学習経験の影響力が大きいと指摘されているが、分析対象である中堅国立大学の学生においてもあてはまるのだろうか。

また、上述したように対象者は 1 年生であり、教育成果に対しては大学入学以前の学習経験の規定力も大きいと考えられる。大学入学後約 1 年が経過した時期において、入学以前と在学中の学習経験を比較した場合、教育成果に対する規定力はどちらが大きいのだろうか。

以上のような疑問を検証課題とし、以下では分析を進めていく。具体的には、まず各変数—大学入学以前の学習経験と在学中の学習経験—と教育成果との関連を個別に検討する。その後、大学入学以前、在学中の学習経験の教育成果に対する規定力を相対的に図るため重回帰分析を行い、規定力の大きさを比較する。



(注) 実線は各変数に対する直接効果を表している。

図1 教育成果規定要因の分析モデル

### 3. 分析結果

#### 3-1. 教育成果としての知識・技能の習得状況

##### (1) 調査時における知識・技能の習得状況

表1には、知識や技能の各項目について、調査時点で自分の実力はどの程度か聞いた結果を示している。結果を概観すると、全体的に自分の実力が「十分」であると認識している学生は少ないことが分かる。いずれの項目においても、6割以上の学生は自分の実力を「やや不十分」、「不十分」として認識している。

結果を細かくみていくと、項目により回答状況に違いがみられる。実力が「十分（「十分」＋「ある程度十分」；以下同様とする）」であると回答している比率が最も高いのが「ものごとを分析的・批判的に考える力」であり、43.6%の学生が自分の実力が「十分」であると認識している。続いて多いのは「幅広い知識・ものの見方」（39.9%）、「問題を見つけ、解決方法を考える力」（37.8%）であり、思考力に関わる項目において比較的评价が高い。それに対して、「将来の職業に関連する知識や技能」（20.1%）、「専門分野の知識・技能」（22.2%）、「専門分野の基礎となるような理論的理解・知識」（24.3%）についての評価は低く、職業や専門分野に関わる知識・技能について「不十分」として認識している。

このような結果は、1年生の授業経験によるものと考え得る。専門科目は2年次以降に開講されることが多く、1年生は教養科目の受講が中心である。専門分野の授業をほとんど受けていない1年生にとって、専門分野に関わる知識・技能の習得は難しいといえる。それゆえ、それら知識・技能の習得は「不十分」として評価しているのではないだろうか。

表1 知識・技能の習得状況（自己評価）

	十分	ある程度十分	やや不十分	不十分	合計
将来の職業に関連する知識や技能	0.8	19.3	55.2	24.7	100.0(1, 120)
専門分野の知識・理解	1.0	21.2	52.1	25.7	100.0(1, 121)
専門分野の基礎となるような理論的理解・知識	1.3	23.0	52.6	23.2	100.0(1, 113)
論理的に文章を書く力	1.3	26.3	52.3	20.1	100.0(1, 118)
人にわかりやすく話す力	1.7	26.9	49.7	21.7	100.0(1, 120)
外国語の力	0.6	17.6	47.2	34.6	100.0(1, 117)
ものごとを分析的・批判的に考える力	4.9	38.7	43.7	12.7	100.0(1, 110)
問題を見つけ、解決方法を考える力	2.9	34.9	48.7	13.6	100.0(1, 114)
幅広い知識、ものの見方	3.4	36.4	47.4	12.7	100.0(1, 114)

(注) 表中の数値は%。括弧内の数値は有効回答者数を示す。

##### (2) 習得された知識・技能の特徴

次に、学生が習得した知識・技能の特徴を構造的に捉えるために、表1に掲載された9項目を用いて因子分析を行った。表2にはその結果を示している。

因子分析の結果2つの因子が抽出された。第一因子は、「ものごとを分析的・批判的に考える力」

「問題を見つけ、解決方法を考える力」、「幅広い知識、ものの見方」、「人にわかりやすく話す力」、「論理的に文章を書く力」より構成されている。これらは、大学での知的活動のみならず将来の職業生活・社会生活でも必要とされる技能といえ【汎用的技能】と命名した。

第二因子は「専門分野の知識・理解」、「将来の職業に関連する知識や技能」、「専門分野の基礎となるような理論的理解・知識」から構成されている。専攻する学問分野や将来の職業に関わる知識・技能、すなわち特定の専門分野における知識・技能の習得に関わる項目より構成されていることから【専門的知識・技能】と命名した。

表2 知識・技能の習得状況に関する因子分析

	汎用的技能	専門的知識・技能
ものごとを分析的・批判的に考える力	0.878	-0.057
問題を見つけ、解決方法を考える力	0.861	-0.009
幅広い知識、ものの見方	0.771	0.062
人にわかりやすく話す力	0.647	0.045
論理的に文章を書く力	0.539	0.140
専門分野の知識・理解	-0.032	0.944
将来の職業に関連する知識や技能	-0.004	0.844
専門分野の基礎となるような理論的理解・知識	0.058	0.844
外国語の力	0.183	0.358
回転後の負荷量平方和	3.952	3.709
因子相関行列	1.000	0.599
	0.599	1.000

(注) 最尤法・プロマックス回転。表には回転後の因子負荷量を示す。

### 3-2. 大学入学以前の学習経験との関連

本節では、大学入学以前の学習経験と教育成果との関連を見ていく。大学入学以前の学習経験には、高校3年生時の学習時間、大学入学以前の学習活動を聞いた「授業の予習・復習をよくする」、「志望校に合格するためによく受験勉強をした」、「本をよく読む」の3項目を用いた。表3には平均値の差の検定を行った結果を示してある。

まず、高校3年生の時の学習時間との関連では【汎用的技能】、【専門的知識・技能】ともに統計的に有意な差は見られない。高校時代の学習時間は、知識・技能の習得には影響していないことが分かる。

大学入学以前の学習活動との関連では、【汎用的技能】、【専門的知識・技能】との間に有意となる項目に違いが見られた。【汎用的技能】において統計的に有意となっている項目<sup>1)</sup>は「本をよく読む」である。学校での授業や受験に関連する学習を熱心に行っていた学生よりも、本をよく読むことで自主的に知識を吸収していた学生の方が、【汎用的技能】の習得状況を評価する傾向にあることが分かる。

一方、【専門的知識・技能】の場合、「授業の予習・復習をよくする」、「志望校に合格するためによく受験勉強をした」で統計的に有意な差が生じていた。【汎用的技能】とは異なり、学校の授業や受験に関連する学習に熱心に取り組んでいた学生ほど、【専門的知識・技能】の習得状況を肯定評価している。

このように、大学入学以前の学習経験との関連では、学習に従事する時間は、知識・技能の習得に

影響を及ぼしていないが、学習活動の様態により【汎用的技能】、【専門的知識・技能】に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

表3 大学入学以前の学習と知識・技能の習得状況

		汎用的技能	専門的知識・技能
高校3年生の時の一日の平均学習時間	していない	0.082	-0.001
	1時間程度	0.057	-0.098
	2時間程度	0.034	0.027
	3時間程度	-0.046	0.003
	4時間程度	-0.012	0.007
授業の予習・復習をよくする	肯定	0.038	0.064 **
	否定	-0.052	-0.092
志望校に合格するためによく受験勉強をした	肯定	0.037 *	0.047 **
	否定	-0.117	-0.153
本をよく読む	肯定	0.125 ***	0.079 *
	否定	-0.108	-0.069

(注1) \*\*\*は $p < 0.01$ 、\*\*は $p < 0.01$ 、\*は $p < 0.05$ である。以下同様。

(注2) 「あてはまる」、「ある程度あてはまる」を合わせて肯定群、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」を合わせて否定群とカテゴリ化した。表5も同様である。

### 3-3. 在学中の学習経験との関連

続いて、在学中の学習活動と教育成果との関連について見ていく。大学入学後の学習経験には、授業以外の場面における学習への取り組みと、授業への取り組みを設定した。

#### (1) 授業外学習と教育成果との関連

授業以外の場面における学習への取り組みには、「授業の準備のための学習」、「授業の準備のための学習」に従事した一週間の平均時間を変数として用いた。学習活動に費やす時間について、「0時間」を「学習無群」、「1時間以上5時間未満」を「学習有(少)群」、「6時間以上」を「学習有(多)群」とカテゴリ化し、カテゴリ間の平均値の差の検定を行った(表4)。

まず、【汎用的技能】では「授業の準備のための学習」、「授業とは関係の無い学習」ともに統計的に有意な差が生じている。両項目ともに学習に費やす時間が多いほど値が高くなっており、【汎用的技能】の習得に正の影響力を持っていることが分かる。【専門的知識・技能】との関連では「授業とは関係のない学習」で有意な差が生じており、従事する時間が長いほど習得状況を肯定的に評価しているという結果を示していた。「授業の準備のための学習」は5%水準ではあるが有意となっており、こちらも従事する時間が長いほど知識・技能の習得に対する評価が良いことがわかる。以上のように【汎用的技能】、【専門的知識・技能】の習得に関しては、いずれも学生の授業外における自主的な学習活動が影響力を持っていた。

表4 大学入学後の学習と知識技能の習得状況

		汎用的技能	専門的知識・技能
授業の準備のための学習	学習無	-0.209 ***	-0.191 *
	学習有(少)	-0.018	0.006
	学習有(多)	0.202	0.104
授業とは関係のない学習	学習無	-0.143 ***	-0.101 **
	学習有(少)	0.075	0.062
	学習有(多)	0.324	0.195

## (2) 授業に対する取り組みと教育成果との関連

前節では授業外における学習活動との関連について見てきたが、本節では大学の授業に対する取り組みとの関連について見ていく。表5には、授業に対してどのように取り組んでいるか聞いた5項目を用い、【汎用的技能】、【専門的知識・技能】について、各項目の平均値の差の検定を行った結果を示している。

まず、【汎用的技能】に対しては、「なるべく良い成績をとるようにしている」、「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」、「先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている」、「必要な予習や復讐はしたうえで授業にのぞんでいる」で、統計的に有意な差が表れていた。いずれも肯定群の方が因子得点が高いことから、授業に積極的に参加している学生ほど【汎用的知識・技能】が身に付いていると認識する傾向にある。一方、「興味がわからない授業でもきちんと出席する」といった授業への出席に関わる項目では統計的に有意な差は生じていない。

表5 授業に対する取り組みと知識・技能の習得状況

		汎用的技能	専門的知識・技能
興味がわからない授業でもきちんと出席する	肯定	0.020	0.047 ***
	否定	-0.110	-0.243
なるべくよい成績をとるようにしている	肯定	0.044 **	0.095 ***
	否定	-0.122	-0.267
グループワークやディスカッションに積極的に参加している	肯定	0.152 ***	0.155 ***
	否定	-0.162	-0.165
先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている	肯定	0.360 ***	0.364 ***
	否定	-0.079	-0.080
必要な予習や復讐はした上で授業にのぞんでいる	肯定	0.137 ***	0.185 ***
	否定	-0.089	-0.121

次に、【専門的知識・技能】について見ていくと「興味がわからない授業でもきちんと出席する」、「なるべく良い成績をとるようにしている」、「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」、「先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている」、「必要な予習や復讐はしたうえで授業にのぞんでいる」、すべての項目で統計的に有意な差が生じており、いずれも肯定群の値が高い。【汎用的技能】とは異なり授業への出席を重視する態度は正の影響力を持っていた。このように、授業に対する取り組みとの関連では、積極的な授業参加が【汎用的技能】、【専門的知識・技能】の習得に影響力を持っていることが明らかとなった。

#### 4. 教育成果の規定要因

ここまで知識・技能の習得と大学入学以前、在学中の学習経験との関連について個別に検討してきた。その結果、知識・技能の習得において、在学中の学習経験は【汎用的技能】、【専門的知識・技能】の習得において有意に影響を及ぼしていることが明らかとなった。一方、大学入学前の学習経験は、学習経験の様態、つまりどのような学習をしてきたかで、【汎用的技能】、【専門的知識・技能】に及ぼす影響は異なっていた。

以上の知見を踏まえ、本章では、大学入学以前の学習経験、在学中の学習経験がどのような構造で教育成果を規定しているのか明らかにするために重回帰分析を行った。従属変数には、教育成果として【汎用的技能】、【専門的知識・技能】に加え「大学の成績」も変数として設定した。独立変数には、ここまでの分析で用いた、大学入学以前の学習経験、在学中の学習経験の各項目の各項目に加え、サークル・部活動やアルバイトなどの「課外活動」や、卒業後の希望進路の有無も変数として投入した。

表6 変数一覧

従属変数	
【汎用的技能】、【専門的知識・技能】の因子得点 「成績」(非常に良い=4、ある程度良い=3、あまりよくない=2、非常によくない=1)	
独立変数	
性別	男性ダミー
専門分野	教育系ダミー
	自然科学系ダミー
	医療系ダミー
大学入学以前の学習経験	高校3年生の時の一日の平均学習時間
	「授業の予習・復習をよくする」、「志望校に合格するためによく受験勉強をした」、「本をよく読む」 (あてはまる=4、ある程度あてはまる=3、あまりあてはまらない=2、あてはまらない=1)
在学中の学習経験	「授業の準備のための学習」、「授業とは関係のない学習」に費やす一週間の平均時間
	授業に対する取り組み5項目 (あてはまる=4、ある程度あてはまる=3、あまりあてはまらない=2、あてはまらない=1)
課外活動	「文化系サークル・クラブ活動」、「体育会系サークル、クラブ活動」、「アルバイト等の仕事経験」に費やす一週間の平均時間
希望進路	希望進路決定ダミー

重回帰分析の結果は表7に示してある。まず、【汎用的技能】について見ていこう。【汎用的技能】の習得には性別の影響が見られた。大学入学以前の学習経験との関連では、統計的に有意となっている項目は「本をよく読む」のみであったが、在学中の学習経験との関連では「授業とは関係のない学習」、「グループワークやディスカッションへ積極的に参加している」、「先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている」「必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる」で有意な正の影響力がみられた。特に、グループワークやディスカッションへの参加、先生への質問、予習・復習などはその値も大きく、積極的な授業参加が【汎用的技能】の習得状況に対する評価を高めていることが明らかとなった。

続いて、【専門的知識・技能】について見ていく。【専門的知識・技能】の習得に対しても、大学入学以前の学習経験よりも、在学中の学習経験の影響が見られた。しかし、「グループワークやディスカッションへ積極的に参加している」、「先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている」といった積極的な授業参加に関わる項目の規定力は統計的に有意となっているが、その大きさは【汎用的技能】の場合と比較すると小さい。

規定力の大きい項目は「授業の準備のための学習」、「必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる」の2項目である。2つの項目は、授業関連学習に関わる行動を尋ねたものであるが、そのベクトルは逆向きである。すなわち、「授業の予習や復習はした上で授業にのぞんでいる」では正の規定力を、「授業の準備のための学習」は負の規定力を持っていた。この結果は、授業の予習・復習は【専門的知識・技能】習得に対する評価を高めるが、それに時間をかけすぎると逆効果であることを示しているといえる。

表7 教育成果の規定要因

		汎用的技能	専門的知識・技能	成績
性別	男性ダミー	0.156 ***	0.099 **	-0.046
専門分野	教育ダミー	0.034	-0.023	0.107 ***
	自然科学ダミー	0.023	0.026	-0.029
	医療ダミー	0.020	-0.010	0.099 **
大学入学以前の学習経験	高校3年生の時の一日の平均学習時間	-0.067	-0.034	0.027
	授業の予習・復習をよくする	0.051	0.081 *	0.117 ***
	志望校に合格するためによく受験勉強をした	0.038	0.030	0.008
	本をよく読む	0.111 ***	0.058	0.000
在学中の学習経験	授業の準備のための学習	-0.076 *	-0.131 ***	0.000
	授業とは関係のない学習	0.094 **	0.094 **	-0.024
	興味がわからない授業でもきちんと出席する	0.042	0.062	0.083 **
	なるべくよい成績をとるようにしている	-0.034	0.029	0.354 ***
	グループワークやディスカッションに積極的に参加している	0.119 ***	0.076 *	-0.019
	先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている	0.111 **	0.097 **	0.066 *
	必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる	0.109 **	0.129 ***	0.056
課外活動	文化系サークル・クラブ活動	0.075 *	0.062	0.004
	体育会系サークル・クラブ活動	0.041	0.054	-0.046
	アルバイト等の仕事経験	-0.012	-0.033	-0.067 *
進路希望	希望進路決定ダミー	0.038	0.024	0.011
調整済 R <sup>2</sup> 値		0.106	0.084	0.296
F 値		7.142 ***	5.738 ***	24.266 ***

最後に、成績に影響を与える項目を見ていこう。成績に対しては【汎用的技能】、【専門的知識・技能】とは異なり、専門分野の影響が見られた。特に教育学部、医療系の学部にも所属している学生は



ど大学の成績が良い傾向にある。学習経験との関連では、積極的な授業参加の影響はそれほど見られず、【汎用的技能】、【専門的知識・技能】の場合と異なり「興味がわからない授業でもきちんと出席する」、「なるべく良い成績をとろうとしている」の影響が見られた。特に、「なるべく良い成績をとるようにしている」の係数が特出して大きく、良い成績を修めるには、学生が成績をどの程度重要視しているのかに規定されていることが明らかとなった。

## 5. おわりに

本研究では、地方都市に所在する中堅国立 A 大学の 1 年生を対象に、教育成果がいかなる構造において規定されているのか、学習経験との関連を中心に検討してきた。

在学中の学習経験は、【汎用的技能】、【専門的知識・技能】、成績のいずれに対しても影響力を持っており、入学前の学習経験と比較してその影響力は相対的に大きくなっていった。得られた結果は、先行研究の知見とも整合的であり、地方中堅国立大学の学生においても在学中の学習経験は教育成果の獲得に重要であること、また大学入学後約 1 年を経過した時点では、既に大学入学後の学習経験の方が大学入学以前の学習経験よりも知識・技能の獲得においてインパクトを持っている点が明らかとなった。

このように在学中の学習経験は教育成果に重要なインパクトを及ぼしているが、影響を及ぼしている学習経験は教育成果それぞれに対して特徴的な傾向を示していた。【汎用的技能】の習得には、積極的な授業参加の影響力が大きいですが、【専門的知識・技能】の習得に対するそれらの影響力はそれほど大きくはない。むしろ、授業外での学習行動のインパクトの方が大きかった。また、成績に対しては授業に対する取り組みや授業外での学習よりも、成績を重視する姿勢の方がインパクトを持っていた。

本分析から得られた以上のような知見は大学教育に対して、いかに還元できるだろうか。在学中の学習経験が教育成果に及ぼすインパクトが大きいことを考えると、大学教育が学生の知識・技能の習得に介在する余地は十分あると考えられる。例えば、汎用的な知識・技能を学生に習得させたいと目標を掲げた場合、授業においてグループワークやディスカッションの機会を設けたり、予習復習を行うよう指導したりすることが効果的であろう。専門的な知識・技能の習得であっても、それらは効果的であるだろうし、本分析結果に従えば「授業の準備」に過度に時間をかけないよう指導することも有効であろう。

しかし、これらは学生の学習経験と教育成果との関連から考え得る効果的な大学教育の在り方である。大学教育に対してより有効な改善策を提示するには、学生の学習経験に加えて、学生がいかなる大学教育を受けたか、例えば、グループワークの機会、課題等への適切なフィードバック、初年次教育やキャリア教育の受講経験など、教育経験の影響についても検討する必要があるだろう。このような教育経験が教育成果をいかに規定しているのか、学習経験と合わせて検討することで、大学教育の改善に対してより有効なインプリケーションとなりうるだろう。

残念ながら本研究では、調査項目の都合により教育経験と教育成果の関連については検討できなかった。この点については今後の調査・分析課題としたい<sup>2)</sup>。

## 注

- 1) 本稿ではカイ二乗検定の結果 1%、0.1%水準で有意となっているものを中心に検討を行っている。
- 2) 先行研究（たとえば、村澤 2003、葛城 2006、小方 2008）では、教育経験と学習経験を比較し、学習経験の方が教育成果に及ぼす影響力が大きいことを指摘している。このような知見が本研究の分析対象である地方中堅国立大学の学生においてもあてはまるかどうか、すなわち地方中堅国立大学の学生の教育成果がかれらの教育経験、学習経験によっていかに規定されるのか明らかにすることを今後の課題としたい。

## 参考文献

- 小方直幸、2008、「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』第 11 集、45-64 頁。
- 金子元久、2007、『大学の教育力—何を教え学ぶか』筑摩書房。
- 葛城浩一、2006、「在学生によるカリキュラム評価の可能性と限界」『高等教育研究』第 9 集、161-180 頁。
- 葛城浩一、2008、「学習経験の量に対するカリキュラムの影響力—大学教育によって直接的に促される学習経験に着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部、第 57 号、133-140 頁。
- 武内清編、2003、『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。
- 武内清編、2005、『大学とキャンパスライフ』上智大学出版。
- 藤井泰・山田浩之編、2005、『地方都市における学生文化の形成過程』松山大学地域研究センター。
- ベネッセ、1998、『大学満足度と大学教育の問題点』。
- ベネッセ、2002、『大学満足度と大学教育の問題点 2001 年度』。
- ベネッセ、2004、『大学満足度と大学教育の問題点 2004 年度』。
- 村澤昌崇、2003、「学生の力量形成における大学教育の効果」有本章編『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部、7-89 頁。
- 文部科学省、2008、『学士課程教育の構築に向けて』（答申）。
- 山田浩之、2009、「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部（教育人間科学関連領域）第 58 号、27-35 頁。
- 山田礼子、2007、『転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究』平成 16-18 年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書。
- 山田礼子、2008、「学生の情緒的側面の充実と教育成果—CSS と JCSS 結果分析から—」『大学論集』第 40 集、広島大学高等教育研究開発センター、181-198 頁。
- 山内乾史、2004、『現代大学教育論—学生・授業・実践組織—』東信堂。
- リクルート、1998、「大学教育改革の学生認知度調査 1998」『カレッジマネジメント』89、4-79 頁。
- リクルート、2000、「大学教育改革の学生認知度調査 2000」『カレッジマネジメント』101、21-95 頁。